

【氏名】田中 由理

【所属大学院】(助成決定時)

大阪大学大学院文学研究科

【研究題目】

日本列島・朝鮮半島の古代国家形成期における馬匹利用の比較考古学的検討

【研究の目的】

本研究の目的は日本列島・朝鮮半島出土の馬具の検討を通して、それぞれの地域の古墳時代・三国時代の社会における、馬の利用のあり方、馬装の社会的意義、馬具生産の展開などを考古学的に解明するものである。具体的には以下の点である。

- ①日本列島、新羅、百済、伽耶地域において出土する馬具を、鉄の加工技術をもとに分類、比較検討を行う。
- ②朝鮮半島各地域・日本列島の馬匹の受容・普及過程を明らかにし、馬匹の社会的な役割を比較、検証することで、歴史的評価を提示する。
- ③日本列島の馬具、馬匹生産の導入における受容過程を地域間関係の中で明らかにし、日本列島の古墳時代史の中の位置づけを行う。

【研究の内容・方法】

本研究では、主に轡の検討を行う。轡が馬の制御に必須の部品である一方で、装飾的な役割も充分帯び得ること、また、基本的に金属からなり、皮革や木材による製作も可能な鞍や鎧よりは全容が分かりやすいためである。轡に関しては、材料の形状の差異に注目し、①鉄ないし銅や銀の板を切り出して作る鏡板を持つ轡(鏡板付轡・韓国では板轡と呼称)、②棒鋼を曲げ鍛接して作る轡(鑣轡・素環状鏡板付轡)に分けて検討する。

装飾的要素が最も強い①の鏡板付轡に関しては、鏡板の外形線の比較検討を行う。この手法は朝鮮半島出土馬具においても適用可能であり、新羅・伽耶といった地域ごとの差異も明確であるため、日本列島出土例とも充分比較できる(この検討には杏葉も含める)。鋌や製作技法などのほかの属性も加えて検討することで、馬具の持つ性格の一端を知ることが可能と考えられる。

②の鑣轡と素環状鏡板付轡は、それぞれの盛行時期と主たる出土地域が、前者については5世紀以前の朝鮮半島、後者については6世紀以降の日本列島であり、ほぼ重ならない。しかし両者は共に高い実用性を備えるものであることから、本研究ではあえて比較考古学的分析の対象とする。共に棒鋼から製作されるという特性に注目した鍛接技術や法量といった属性、出土古墳の性格を検討することで、実用性の度合い、両者の類似点と相違点を明らかにし、それらを採用した社会の性格を考察する。

以上の視点をもって、馬装の社会的意義、馬具生産の展開を含めた、馬匹利用の変遷過程を

明らかにする。そのうえで、日本列島出土馬具の研究に立ちかえり、馬匹の受容過程を地域間関係の中で明らかにすることで、系譜論的な指摘も行う。

#### 【結論・考察】

鏡板付轡や杏葉の外形線の比較検討において、新羅で製作された扁円魚尾形杏葉には王陵から出土するものと、周辺地域の古墳から出土するものでは、法量・技術などに大きな格差があるうえ、後者は高い規格性を持って配布のために大量生産されていることが分かった。一方、伽耶において、新羅産の製品と形態・法量の類似するものはあるものの、在地の技法を用いて模倣製作したものであり、馬具に対する志向の違いがうかがえた。また、大伽耶・百濟地域で創出され、後に日本列島で盛行した剣菱形杏葉の形態比較と出土地の分析によって、列島と半島の政治的な交流の様相を明らかにすることもできた。

また轡の銜と引手の長さの法量分布を比較した結果、朝鮮半島のものは、時期を通じて長さを一定に保っていることが分かり、馬匹の生産管理を行っていた可能性を指摘できた。また日本列島内においても、銜や引手の長さには地域差があることが分かり、地域による差異を朝鮮半島における地域性や歴史的背景と組み合わせて考えることで、より具体的な地域間交流の様相を明らかにすることができた。